

『父がくれた宝物』

高知県

土佐町少年剣道

中学3年 澤田陽美

「行ってきますお父さん。」

試合会場に入る前、私は決まってこうつぶやきます。そしたら父が、

「頑張ってこいよ。」

と背中を押してくれる気がするからです。

中学生になる前、同級生の友達が中学校では他の部活動に入ると言ったことと、中学校剣道部の練習の厳しさを目にして、私は、

「中学生になったら剣道部には入らんで。」

と父に言いました。ある夜、父は私に、

「道場の先生も心配して手紙を書いてくれ、周りの人も陽（ひな）の事をとても心配しよるぞ。」

お父さんも今剣道をやめるのはもったいないと思う。今やめたら後悔するんじゃないか。」

と私に言いました。私は、「後悔なんかするわけがない。やった方が後悔するかもしれんやんか。」

と思いました。でも、いつもはもっと軽い感じという父がこの時は、私に真剣に話をしてくれました。私は、

「剣道を続けていく自信が無い。」

と泣きながら父にうったえました。そんな私に、父は笑いながら、

「最初から誰も自信なんか無い、やってみてどうしてもだめな時はやめたらえい。お父さんも応援するき頑張りや。陽（ひな）ならできる。」

と言って私の頭をなでてくれました。私は、

「やってみる。」

と言ってうなずきました。

中学校で剣道部に入った私は、稽古の厳しさに涙を流す毎日でしたが、それでも先輩たちに少しでも近づけるように、日々の稽古に取り組みました。でも、入部して一ヶ月程たち、私は体調を崩し、稽古を休みがちになりました。そんな私を見て父は、仕事の忙しい中、少年剣道や部活の先生に相談に行ったり、父なりに出来る事をして私をずっと支えてくれました。私は、父の励ましで何とか一年間剣道を続ける事ができました。

二年生になると、私はこのチームで「全国をめざす」という目標を持つようになりました。父も私の試合をいつも見に来てくれて、私が活躍した時は、自分のこと以上に喜ん

でくれました。

そして、全中の一步手前で敗れた時、泣いている私をやさしくなぐさめてくれました。

私が中学二年の秋、ある朝、父は交通事故で他界しました。昨日まで笑って、

「最近、部活どうや。」

と言っていたあの顔が、色白く、傷だらけで帰ってきました。その日から私は、何をするにも気持ちが入らず、稽古も休むようになりました。後輩たちが頑張ってくれているのに、

「私は何をしているんだろう。」と思いながらも稽古には行けず、そうしているうちに見離されるんじゃないかという恐怖でますますまわりと一線を引くようになりました。そんなある日、写真の父が「陽ならできる。」と言っているような気がしました。私が、久しぶりに稽古に行くと、みんなは私の体調を気遣ってくれました。私もだんだんと前向きになり、みんなのためにも、「もう一度全国を目指そう。」という気持ちになりました。

最後の県総体で先生が言ってくれた、

「お父さんは陽美をいつも見てくれゆよ。」

という言葉を支えに私は戦いました。私たちのチームは、全国には行けませんでした、県総体三位、秋季大会では二位という成績を残すことができました。私には、父が笑って喜んでくれているように思えました。

私は今、「こんなに温かい剣道部に入って良かった。後悔もしていない。」と心から言えます。

そして、今まで支えてくれた仲間や先生、何よりも父と父が亡くなってから私を支えてくれた母に感謝をしています。

これは、『父が私にくれた宝物』だと思います。

私は、剣道で学んだことを心に留め、自分に負けないように、父に笑われないように、生きていきたいと思っています。